

うすぼんやりした記憶

作成者:村上 慧

2023年5月14日

はじめに

3月18日から二日間ほど現場へ行った。井戸掘り作業の続きをおこない、近所で新しい出会いもあった。本号ではその報告を行う。ただし、私的な都合で報告書の作成が遅れてしまい、すでに記憶がぼんやりしている。頼りになるのは携帯電話に残された、当時の雑多なメモである。普段はこのメモを土台に数週間かけて報告書を書いているのだが、2ヶ月前のことをじっくり書き下ろすには記憶が曖昧すぎるので、本号ではメモをそのまま掲載し、それに注釈を加えていく形で書いてみる。記憶がないことを逆手にとって、より他人事っぽく記述する試みである。

3月18日

<メモ①>

下道をのんびりと走り3時間から4時間かけて現場に到着した丸[注1]走っている最中結構時間かかるなと思ったけれども80キロあるので歩きだと3日か4日かかることを考えると3時間から4時間で着くのはマーボーナスタイムと言うかラッキーだと思えば頭に時間がかかることも渋滞もあまり気にならなくなる[注2]。

[注1]句点(.)の変換ミスと思われる。音声入力でメモしていると、たまにこういうことが起こる。全く関係ないが、日本で漁船などに「丸」という名前をつけているのは、自分のことを指す「麿」という言葉が「丸」に変わったという説がある。

[注2]現場までの距離が80kmなので、徒歩だと数日かかることを考えれば車で3、4時間かかっても超速く感じる、という意味だろう。さらにいえば、私には移動生活をしてきた経験があるので、自分の中に残っている「徒歩移動」の時間感覚を思い出せば、長い渋滞も苦痛ではなくなる、というニュアンスも含まれていると思う。「マーボーナスタイム」は麻婆茄子のことではなく「まあ、ボーナスタイム」の変換ミスだろう。

現場に到着してすぐにクリーンセンター入浴施設に電話し、入浴の予約をしたいんですけど。おひとりですか？ ひとりです。何時頃がよろしいですか？ 今日が一番遅い時間だと何時ですか？ 6時です。じゃあ6時でお願いします。カードに書かれている番号と名前を伝え、よろしくどうぞと言われ、電話を切る。

それにしても結構な雨だ。完全に防水スタイルで採用[注3]しないとならない車の中でしかしに荷台は落ち葉で埋まっている[注4]ので運転席で着替えなければならない。

[注3]たぶん「作業」の変換ミスと思われる。

[注4](本報告書第四号で報告した、主に甲州街道沿いで集められた)ケヤキの落ち葉が詰まった袋をいくつも積んできたせいで、作業着に着替えるスペースが荷台に確保できない。なので運転席で着替えなければならない。せまくて大変だ、という意味のことを、律儀にも書き残している。

<メモ②>

雨の中一時間ほどがんばって80センチ沈めた[注5]

雨がやまないと井戸枠が延長できない[注6]ので今日は中断。16時45分

[注5]この日はずっと小雨が降っていたことをかすかに覚えている。当時の写真を見返すと、現場に到着したのは14時半ごろで、わたしはそれから2時間ほどかけて井戸掘り作業を行い、80センチほど掘り進めたようだ。

[注6]井戸枠を地面ギリギリまで打ち込んだので、次の塩ビ管を継ぎ足さなければいけなくなったが、雨の中では接着剤が濡れてしまってよくないので中断した、という意味だろう。この日の作業についてのメモはこの二行しか残っていなかったので、特段変わったことはなかったのだろうということが推測される。

うすぼんやりした記憶

作成者:村上 慧

2023年5月14日

<メモ③>

また例によって高くてすいませんねえ、と言われたので

個人事業主で、こちらに現場があるんですが…と言ってみたら、じゃあ、大丈夫じゃないですかねえ。ということになり、山武市の住所を書いたら半額の400円になった。カードは新しく、ブルーからピンクになった[注7]

[注7]いきなり話が飛んでしまっているが、これは「クリーンセンター入浴施設」でのことである。現場作業を終え、お風呂に入るために入浴施設に行き、いつも通り800円を支払おうとした(公営施設であるためか、近隣の市民とそれ以外では入浴料が異なっている。山武市、東金市、大網白里市、九十九里町のいずれか在住のひとは400円、それ以外は800円となっている。私のように東京都三鷹市から入浴に来るのはレアケースと思われる)。すると受付のおばちゃんが「高くてごめんなさいねえ」と言ったので、私は「山武市に仕事現場があるのですが、山武市民扱いになりませんか」というニュアンスのことを訊いた。おばちゃんと、同じくスタッフのおじちゃんは顔を付き合わせて「じゃあ」「大丈夫ですよ」「大丈夫じゃないですかねえ」と話しあい、結果「大丈夫」になり、私は400円で利用することができた。入浴施設が発行している「利用者カード」の色が、市内利用者とそれ以外で異なるらしく、私のカードは「ブルーからピンクになる」旨を、スタッフの二人から告げられた、という意味である

<メモ④>

メガネが高い、という話を、めちゃくちゃ大音量で話している。信じられないほどでかい声。廊下までピンピン聞こえる。脱衣所でおじさんの話を聞いているのは、もうひとりのおじさんだけなんだけど、そして、内容もとても些細なことなのだけど、その内容と、声の量と一語一語しっかりと発話する感じがマッチしないので、斬新な取り合わせの料理のよう。

三万円でつくったのになあ、なおしにいかないといけないんですよ。メガネって高いもんねえ。たかいですよお！ぼく「こんちは～」おじさん「こんばんは～」[注8]

[注8]脱衣所でおじさん二人がでかい声でメガネの話をしている、という話である。音量の大仰さに対して内容がささやかすぎるので面白かった、ということ述べている。

<メモ⑤>

入ると、露天風呂の水がからだった。扉に、安全上の理由から当面の間露天風呂の使用が停止しますと書かれていた。

じ風呂[注9]に入っていると脱衣場の方から湯けむりの中村上さんと呼ぶ声がする反射的にはいと返事をすると村上さんとおじさんが受付にいたおじさんが僕を指さしてたって言った。サトシっていう漢字がよくわからなくてね。ちょっといいですか。新しいカードに書くので。[注10]

[注9]「内風呂」の変換ミスと思われる。

[注10]湯煙のなか、風呂に浸かっていたら、どこからか「村上さん」と呼ぶ声がした。「はい」と返事をしてまわりを見渡すと、脱衣所に出る扉がすこしだけ開いており、そこに受付にいたおじさんが立っていた。おじさんは、新しい利用者カードに名前を書きたいのだけど、漢字が難しくてわからないので、ちょっと来て教えてくれと頼んできた、という意味。

うすぼんやりした記憶

作成者:村上 慧

2023年5月14日

そう言っておじさんは僕に脱衣所に出るように流して[注 11]引っ込んでしまった僕は思わず笑って入って[注 12]別に今じゃなくてもいいんじゃないかと思いつつ立ち上がって浴槽の中をざぼざぼと横切って脱衣所に出た受付のおじさんは紙とペンを持って洗面台のところに紙を置いてちょっとこのサトシの上の棒のところがよく分からないんだけどどうなってるんですかねと聞いてきた僕はちょっと待ってくださいねと言っていったん風呂場に引っ込んで自分のタオルで手を拭いてまた脱衣所に出て自分の名前の漢字をおじさんが持ってきた白い紙折り紙ぐらいのサイズの紙にボールペンで大きく書いた。なるほど棒が出て、ヨ、で心、か、僕は分からないですよねと言って鍵[注 13]を返したおじさんはどうもと言ってさっさと行ってしまった。ぼくは風呂場に戻って。浴槽に浸かっている奥[注 14]が脱衣所から呼び出されて外に出てまた帰ってきた、その様子を風呂場で体を洗っていたおじさんは別に何を気にする様子もなく引き続き身体を洗っていた。

しばらくそのおじさんと二人だったけど嫌がって[注 15]例の刺青のおじさんが登場。体をシャワーで流してから僕とは反対側の角の湯船につかった。体を洗っていたおじさんが脱衣場に出てもクモ湯船から[注 15]立ち上がり体を洗い始めてしばらくすると刺青のおじさんも体を洗い始めて僕が先に出た最後まで風呂場の二人のおじさんとは言葉を交わさなかった。

受付で新しいピンク色の利用者カードを受け取ってこれで間違いないですかとおじさんとおばさんが二人でニコニコと聞いてくれたのでこれで間違いないですと僕もニコニコと答え、ありがとうございますとクリーンセンター入浴施設を出た。[注 17]

[注 11]「促して」の変換ミスと思われる。

[注 12]「笑ってしまって」の変換ミスと思われる。

[注 13]「紙」の変換ミスと思われる。

[注 14]「僕」の変換ミスと思われる。

[注 15]「やがて」の変換ミスと思われる。

[注 16]「ぼくも湯船から」の変換ミスと思われる。

[注 17]このメモで書かれていることはいまでもよく覚えている。私的には「なるほど棒が出て、ヨ、で心、か。」の部分が、なんだか文学的だと思う。

<メモ⑥>

風呂で浮いた400円で、まんまやのマディ牛唐揚げ定食から刺身定食1500円にグレードアップ[注 18]

まんまやは最高だ。お忘れ物、なさいませぬように、とおばちゃんが目元に笑みを浮かべ、深々とお辞儀をして見送ってくれるところを、すいません領収書いただけますか？と遮ってしまった。つみれ汁がアホみたいにならなかつた。

しかしいつ来ても客がいない。いっかいだけ、二人組の客を見たことがあるけど、それ以外は一度もない。大丈夫なのか。これほどの名店が[注 19]。

駐車場があることに気が付かず、通り過ぎてしまう人がある、悲しい可能性について。

[注 18]「マディ牛唐揚げ定食」(1100円)をいつもなら頼んでいただろうが、入浴施設で400円安く入れたので、1500円の刺身定食に変えた、という意味。ちなみにマディ牛というのは、Wikipediaによると福島県の「飯館牛」の血を引く牛肉であり、2011年の原発事故の影響で飯館村から山武市に牛と共に避難してきた肉牛農家が生産している。

[注 19]「まんまや」は名店である。地元の農産物で作った美味しい料理を安く提供してくれる。

うすぼんやりした記憶

作成者:村上 慧

2023年5月14日

<とつぜんのコラムコーナー>

普段わたしたちが目にする多くの文章(新聞記事やエッセイや新書や SNS などほとんどすべての文章)には、書き手が(多くのばあい無意識のうちに)前提にしている「土台」がある。書き手はその土台に立って文章を書く。これを「地の文」と呼ぶ。「普段わたしたちが目にする多くの文章には、地の文がある」という文章も、地の文である。

例えば

「たとお金にならなくても、やるべき仕事というものがある。それを見つけることが大切だ」

は地の文で書かれているが、

「お金にならないとは、どういう意味だろう。お金に変身しないということだろうか。それとも、なんらかの慣習的な意味があるのだろうか。いったいどういうことなんだろう」

は地の文ではない。読者が書き手の主張を受け取るための拠り所がない。(もっとうまい例えがあればよいのだが、わたしにはこれが限界である)

この土台は書き手がなにかを述べるためには必要である。根元のない矢印は、矢印として機能しない。この土台があるからこそ読者は、そこに書かれているニュースや、書き手の考えといった「報告」を安心して受け取ることができるし、書き手も安心して書くことができる。本報告でいうところの[注]の部分も、地の文であるといってよい。もし[注]がなければ、読んでいてちょっと不安になると思う。

わたしはこういった、読んでいて不安になる文章が大好きだが、これをそのまま載せただけでは多くの人が楽しく読めるような、エンタメ的な消費対象にはならないと思う。足場がなくなってしまうと、書かれていることをうまく受け取れなくなるのである。帰る家がない状態で旅行に行くようなものかもしれない。

文章に限らず、ラジオとかテレビとかポッドキャストとかも同様に、話し手と聞き手双方にとって前提となっている、「このように言葉を使えば、わたしはあなたに意味を伝えることができる」という土台がある。多くの場合、言葉を使うということは(無意識のうちに)この土台に乗るということである。

ふと、この土台の居心地が悪くなることがある。わたしは何事か(言葉の使い方とか、知識とか、思想とかなんでもいいのだけど)を知っている存在である、という宣言をしているように思えてしまって、なんだか偉そうで、気持ちが悪い。とはいえ、わたしには書かなければならないことがある。そしてなにかを伝えるためには、土台は必要だ。なので、この違和感を誤魔化しながらでも、どうにかして書かねばと思ひ、過去の本報告書においても、過剰にものごとを断定してみたり、おもしろおかしく書いてみたりしている。本稿で[注]を用いて書いているのも、その試行錯誤のひとつである。

しかしフィクションなら(小説や詩なら)、この前提に立たず、地の文を使わずに文章を書くことができる(かもしれない)。よく言われる「フィクションでしか書けないものがある」というのは、こういう意味である。わたしは芸術が好きで、このどうしようもない世界で希望を持つためには芸術に携わるしかないと思っているほどだが、それは芸術が、ここでいう「地の文」を疑ってかかるような営みだからである。それはわたしを不安にさせる。よい作品をみるたびに、あたりまえだと思っていた土台が壊されていく。地面だと思っていたものが、ベニヤ板でできたハリボテだったと気付かされるようなこわい体験だが、わたしにはこれが心地よい。足場を崩されるこの快楽を一度味わってしまうと、もう後戻りできない。わたしも自分の足場をどんどん崩していきたい、と思う(と、書いている文章自体がもう地の文になってしまっている。芸術は難しい)。

橋爪大三郎が『言語ゲームの練習問題』(講談社現代新書)で書いていた、ワイトゲンシュタインが『哲学探究』で試みた地の文がない文体についての考察を読んで、本稿の[注]に通じるものがあると思ったので、書いてみた。

<メモ⑦>

サントリーウイスキーの小瓶とプレッツェルチェダーチーズ味と黒かりんとうで晩酌。

ジョジョ第九部を、マンスリージャンプの初月購読無料キャンペーンまで使って2話までよんでたら22時になってしまった。面白すぎる。[注 20]

[注 20]何時から晩酌を始めたかが書かれていないので、「22時になってしまった」と言われても困る。

うすぼんやりした記憶

作成者:村上 慧

2023年5月14日

3月19日

<メモ⑧>

6時に起きて二度寝。時系列で物語を追うのではなく、一文を読み通したときと、そうでないときで、受け取れるものが違う小説というものは可能なのか、みたいな謎のアイデアが寝ぼけた頭に浮かんできてそれがどういうことなのか考えているうちに二度寝してしまった。8時過ぎから行動開始。[注 21]

[注 21]「一文を読み通したときとそうでないときで受け取れるものが違う」とは面白げな書き方だが、よく考えるとすべての文章はすでにそうなっているのではないか。

<メモ⑨>

みなこんにちわー！と、笑顔で迎えて切れる。

はじめましてですよ？、とこちらがなのるまえにこえかけてくれた[注 22]

樹齢 750 年[注 23]

敷地内を体に見立てている。みんなでご飯を食べるスペースでもある顔から入り、おしりに田んぼがある。田んぼで作ったものがまた、顔から入ってくる、という循環のイメージを持つため。腸で切った木が根を張る土の水が、田んぼに流れていくことで流れをイメージできる。

チョコレートアンドアックス[注 24]

キョウさん

紹介してもらうときに、肝心の紹介してくれた女性の人が名乗らなかったのも、お姉さんのお名前は？と聞いたやりとりの意味を考えると。繋いでくれたひともめちゃくちゃ重要だと思うのだが。たかさん(うろおぼえ)

代表のふたりともめちゃくちゃいい人で、栗原さんは背が高くてすらっとした佇まいから、木みたいだった。

もちろん、これは誰が悪いかではない。全員がまぎれもなくすばらしくいいひとだったのだが、こういうことはおこる。[注 25]

有野実苑キャンプ場で落ち葉がもらえるという情報

かわいいビール缶[注 26]と、マルタの切り株のかげら

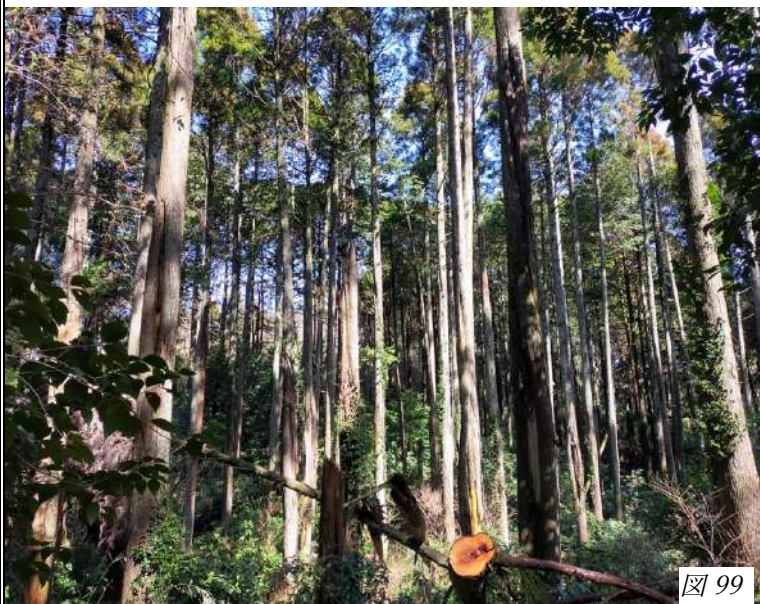


図 99

[注 22]また話が飛んでしまっているが、これは「日向の森」と呼ばれている近所の森(図 99)で活動しているひとたちの拠点に見学に行ったときの出来事である。あちこちからウグイスの鳴き声が聞こえたような気がする。

友人でデザイナーの飯田くんというひとが関わっている、千葉の酒蔵「寺田本家」で使われる木桶の材料となる杉の調達現場が、たまたま私の現場から車で数分のところであったのである。びっくりした。

この日、飯田くんが伐採の見学に来ているというので、私はひとり車で日向の森へ向かい事情もよくわからないまま敷地へ入っていった。すると、とても人の良さそうなひとたちが近づいてきて、私が名乗る前に「初めましてですよ？」と声をかけてくれた、という意味。

うすぼんやりした記憶

作成者:村上 慧

2023年5月14日



図 100

[注 23]伐採された木(図 100)のことかと思われるが、いくらなんでも 750 年はあるえないので、70 年とかの間違いだろう。

[注 24]チャコールアンドアックスというのは、この森を手入れしているひとたちの名前。長年放置されていた市有林である日向の森を、人間の体に見たてながら手を入れ、子供から大人までいろいろなひとが集まる場所になっていた。コンポストトイレや、畑や、立派な掘建小屋(クラブとして使いたいと言っていた気がする)が作られていて、楽しそうだった。(図 101)

[注 25]ある女性が、この「日向の森」活動の中心になっている代表の男性を紹介してくれたのだが、その紹介してくれた女性自身は名乗らず、それが自然なことのような雰囲気では話が終わりそうになったので、こちらから名前を尋ねた、という一連の出来事が、ささやかながらも印象的だったのだろう。

[注 26]かわいいビール缶(図 102)



図 101: 「木遣り歌」を練習しながら、みんなで伐採した杉をロープで引き上げる練習をしていた。「木遣り祭り」というイベントのためらしい。



図 102

<メモ⑩>

銚子方面出身の飯田くん。掘り出された土を見てすぐに

「なつかしい、海の砂みたい」と、匂いを嗅いでいた。[注 27]

つくしとすぎなが同じ植物だという衝撃。斥候みたいに先につくしがでて胞子をまき、あとから地下に栄養を蓄えるためのすぎながでてくる。[注 28]

ずっと悩んでいた最終兵器、でかい木槌を買った。土木工事にも必要になるだろうと判断し、5000 円払った。

[注 27]これは日向の森の見学を終え、飯田くんと彼のスタッフのひとが私の井戸掘り現場に見学に来たときのメモである。掘り出された土はたしかに、海の砂みたいな見た目をしていて(前回の報告書参照)。私も匂いを嗅いでみたが、匂いまではわからなかったと記憶している。

[注 28]つくしとスギナが同じ植物であることを初めて知り、衝撃を受けている。

うすぼんやりした記憶

作成者:村上 慧

2023年5月14日

<メモ⑩>

温泉、激混み。滝口さんが美味しいといった食堂、金曜の繁華街の居酒屋みたいになっている。中華茶房エイトみたい[注 29]

露天風呂のシャボン玉、ライトアップされた無数の玉虫色の泡が風に吹かれて舞っていて、なかなか圧巻だった。アトラクションらしい。綺麗だったし、父親と来ているこどもが「わあ、花火ー」と言っていてその想像力に唸った。しょぼんだまを花火に見立てる感性。僕にはまだあるだろうかという頭をひねったけど、花粉が放出されてるみたい、とか、サンゴの産卵みたい、くらいしか出てこなかった。

[注 29]飯田くんたちが現場にいるとき、裏に住んでる滝口さんがぶらぶらと現れて(汚れひとつない真っ白なズボンを履いていたと記憶している)、酒々井のスーパー銭湯がとてもよいという話をしてくれた。作業を終えた私はその温泉に行ってみたのだが、食堂が激混みで、金曜日の居酒屋みたいに人で溢れていた、という意味。(滝口さんの話は、このあと「裏の滝口さんの話コーナー」で紹介する)

<メモ⑪>

突然の食ベログみたいなレポ [注:ここから、温泉の帰りに寄った台湾料理屋の話が続く。「食ベログ」にみられる、ロコミ投稿者が店の料理とは関係のない道中のこととかその日の心境などを長々と書き連ねる謎の現象への皮肉のつもりだったのだろう]。サイゼリヤに行こうとしたのだがその直前に「台湾料理 聞香」という、めっちゃよさげなお店を見つけてしまい、サイゼリヤの駐車場でUターンして突入。カウンター3席、座敷3席のこぶりな店。愛想のいいおばちゃんが若干たどたどしい日本語で対応してくれる。ほかに四人組の客のみ。中華系 BGM。

牛肉燴飯(牛肉あんかけご飯)を頼もうとしたら、牛肉はもうなくなってしまったとのこと。第2候補の什錦燴飯(五目あんかけご飯)もないとのこと、おすすめはどれですか?と聞いてみたら「炒飯すごく人気よ」とにっこりなので蝦仁炒飯(えびエビチャーハン)を頼む。「ちょっと、お待ち下さいね」と、時間がかかる旨を伝えられる。大丈夫ですよ。と答える。ありがとう、とかすれ声のおばさんにはにっこり。

待ち時間。後ろの席で、料理に髪の毛が入っている、と聞こえてくる。髪の毛…?ああ、もう一度作る? じゃあ他のでもいいですか? 小籠包と焼餃子…と客。大変失礼しました。とおばさん。いえいえ、と客。この四人組、無言の時間がポツポツある。

高級料理店とかではなく町中華みたいな店なんだから髪の毛くらいいいじゃないかと思わなくもないけど、四人のグループなので、これくらいいいか、となりにくいのかもしれないなあとも思う。ひとり気にする人がいたら、他の三人が気にならないとしても、このような事例は全会一致じゃないと決まらない採決みたいなもので、見過ごすわけにはいなくなるのかもしれない。一人では気にならなくても、グループになると気にしないわけにはいなくなる、極端な話、一人でいるときは髪の毛を黙って取り除いて何事もなかったかのように食事を続けられる人だけのグループだったとしても、集団になるとみんながお互いを付度してしまい、あとに引けなくなるという可能性云々など考えてみたけど、まあ髪の毛がゆるせるひもあればゆるせない日もあるだろうし、人生は続き髪の毛がはいっていたこともやがて忘れ、なんならこれだけあれこれ書いてしまった僕のほうがながく覚えているかもなと思いついたところで、どうでもよくなる。おばさん、髪の毛の客たちに、恥ずかしい。初めてだ、と言っている。客たちはいえいえ。すいません、とごく低姿勢。えびチャーハン、めちゃうちやうまい。こんなうまい炒飯はなかなかたべられない…。肩から上腕にかけての筋肉がだるい。塩ビパイプをもちあげる負担が。8メートル[注:井戸掘りに使っているパイプの長さのこと]にもなると結構な重さ。大型酸素BOXのチラシ、「人」と「犬+人」の欄があっておもしろい。犬て。しかし下段には「犬(ワンちゃん)」との表記。最高。[注:犬も入れる酸素カプセルのチラシがカウンターに置かれていて、ぶっきらぼうに「犬」と書かれているのが面白い、という意味]

うすぼんやりした記憶

作成者:村上 慧

2023年5月14日

会計のとき

すごく美味しかったです。と伝えた。ポッドキャストで、わたしたち店員は(お客さんのなにげないひとえとかでかんたんに喜ぶものだから、だからジブンが店に行くときはいいと思ったらできるだけ伝えるようにしてる、みたいなことを言っていて、素敵だと。先日の、はっしーさんの紙芝居を思い出した。お互いのいいところを言い合うことで、世界は平和になりました。[注:知人が「みんながお互いのよいところを言い合うことで世界は平和になりましたというふう飛んだ紙芝居を作っていたことを思い出している]

もしサイゼリアに入っていたらここには何が書かれていたろうと考える。

それで何か人生が変わるような大きな出来事があったかどうかは分からないが、かといってここに書かれた些細な出来事(例えば隣の家族連れがこんなことを話していたとか)が変わったくらいで、人生は変わらないのかと聞かれても、それもわからない。

<メモ⑬>

歯を磨いて車の中で寝袋に入りふと思いついて後部座席のスライドドアを開けてみた。10袋[注30]に入った体のすぐ隣に外の世界が広がっているという形これが素晴らしくて寝袋の中で足をバタバタ一人させてしまうほど満ち足りた気持ちになった。ほしがきれいだったのだ。これは幸せかもなあとつぶやいた。なぜ今までやらなかったのか。なぜか台湾料理屋のおばちゃんのことを思い出した。あのおばちゃんはこの星を見ているだろうかと思った。たぶん後はもう寝るだけと言うのがこの幸福感をわき上がらせているのだろうと思うけれども、あとはもう寝るだけ、というわりとしょうもない気持ちが大きく作用してしまって、星が綺麗に見えたり幸せを感じたりするという、人間はなんだか悲しい生き物だ、とも。

ドアを締めた途端一気に世界が遮断され、同じ空間にいるものとは思えない。

[注30]「寝袋」の変換ミスかと

<裏の滝口さんの話コーナー(当時のメモから、話し言葉ふうにも再構築したもの)>

「綺麗な水を出すなら、20mじゃ出ない。20mでも出ない。30m近く、25から30近くやらないと、綺麗な水は出ないって言ってるね。わたしとこも、最初水道がなかったの、茶色くて、井戸水を濾過するあれ、あるじゃないですか。あれをそっちゅう変えてたの。それで洗濯すると白いやつが茶っぽくなってたの。このへんみんなですよ。それで、いまから20年くらい前に水道が通るってことで、この辺の人はぜんぶ水道にしたんですよ。

さすがに水道になったら、もう透明で、もう飲める水なんで。それも結構お金ずいぶんつかったはずですよ。市がやるって言っても、水道は高かった。40万くらい払ったかな。水道引くのに、田舎はね。都心だったらもう、タダでしょう? もう通ってるんだから。こっちはいちからパイプ通すんだから。ひとりだいたい40万くらい、私の記憶では。けっこう高いこというなあと思って。

だけどみんな払ったからね。洗濯ものも、そっから真っ白になったもんで。ありがたいですよええ。

そのときに井戸屋さんが、私の知ってる範囲では、30から40って言ってかな。そのくらい掘らないと透明の水は出ないよっていうことで。当時ほとんど20mらしいんですよ。このへんで。まだ水道がないころに家建てたい人は、業者が20mくらいしか掘らなかったんですよ。結構高いんですよ、あれ掘るのも。

これ余談になるけど隣の酒々井のアウトレットのまんまえに温泉があるんですよ。もうそっちゅう、私も大好きで、もう、大好き。そしたらそこがね、2000メーター。2000メーター掘ってる。井戸屋さんが掘ったと思うんだけど。それで温泉が出てきたから、まわりに何もなかったんで、それを作ったんですよ。だってお風呂もたくさんあるし、女の人もすごい多いですよ。女の人も温泉好きなんですよ。だって私なんか行くと、長い時は8時間いますよ。昼ごはん食べて、夜ご飯食べて帰ってくるんだから。一日。風呂に8時間入ったらふやけちゃうけど、ご飯もおいしいんですよ。うどんとか、手打ちうどんね。

このへんの人は八街、日向どとか、酒々井どとか、けっこうきますよ。土日は混んでる。みなさんアウトレットに行って買い物して、食事して、風呂も入って、夕方過ぎまで道路が混んでるから、7時半くらいになると空いてるから。みんなそこでお風呂入って帰るんですよ。家族が。うちの娘夫婦もよくきて、そこで待ち合わせして、アウトレットで買い物して、それで晩御飯ごちそうして、さよならって、孫たちも帰っていく。そういうパターンです」

うすぼんやりした記憶

作成者:村上 慧

2023年5月14日

「このへん銭湯がなくて…」

「そう、この辺銭湯ないんですよ。わたしが子供の頃は風呂のある家は少なかったけど、さすがにこの時代はみんなあるからね」

「そうそう。だからいつも東金まで行ってるんですけど」

「ああ、東金は銭湯あるのかな、まだ」

「一個ありました。すごい古い、シャワーも出ない」

「ほんと？ ひどいねちょっと」

「でも、いい感じの銭湯でした」

「ああ、やっぱほら！ そういうところが好きなのよ、彼は！」

「ははは」

「ははは」

「しゃれたね、最新式のじゃなくて、なんかこうくたびれたみたいだね」

「ああ、そうかもしれない」

「ね、そんな感じだもん。私がこのあいだ北海道の登別の温泉に行ったときに、まわり真っ白な銀世界で走って行って、400円くらいで、シャンプーと石鹸も買わなくちゃいけない、おばあさんがいるところ。それでおばあさんにお金払って、それでお風呂入るの。ちょっと、百年以上経ってるんだらうなっていう、そういうところだった。きっと、そういうところが似合う」

「そういうところ大好きですね」

「ぜったいそうだよ！ そういうところ行ったら生き生きするよ。そんな気がするわ」

「ははは」

おわり

3月20日

<メモ⑭>

8時前に作業開始。ホトギスの声

セブンイレブンの和菓子アソートいい。2つほど食べたら、血糖値が上がってふだんなら顔を洗って区切らないと出ないやん気が、嘘みたいになってきた[注 31]。

10時40分、ランチをセブン駐車場で納豆巻きと昨日の炭酸水の残り。2つ買っておいてよかった。

てんとう虫の幼虫、それも小さな赤ちゃん個体が社内[注 32]に紛れているので左手の中指に誘導して植え込みに運んだ。

次回こそ井戸の完成

コンクリートブロックの切り方、ユンボレンタル調べること。

[注 31]普段は顔を洗うことで朝のスイッチを入れるのだが、この日は事前にコンビニで買っていた「和菓子アソート」を二つほど食べただけでスイッチが入った、という報告をしている。

[注 32]「車内」の変換ミスかと思われる。車のなかにてんとう虫の幼虫が迷い込んでいたので、手に乗せて植え込みに逃した、という報告をしている。

おわりに

メモはこれで終わっている。ゴープロで撮影された写真によれば、私は今回8メートルほどの深さまで井戸を掘り進めているのだが、肝心の作業のことが書かれたメモはほとんど残っていなかった。一体何をしているのか。

また今回、日向の森の様子を除いて、写真の掲載を控えてみた。撮ってはいるのだが、あまり見返しもしなかった。

うすぼんやりした記憶

作成者:村上 慧

2023年5月14日

写真には「本当のこと」が写っている、とされている。それは私のうすぼんやりした記憶を破壊し、真実とされるものを突きつける(何者かが私のパソコンに侵入し、ありもしない写真をわたしのフォルダに突っ込んだとしても、私はそれに気が付かず、本当にあったこととして受け入れてしまうかもしれない)。

対して文章では、受け取る側によって想像するものが違う。それは言葉が、現実とは本来なんの関係もないからである(荒川修作ふうに言うなら「言葉には、1パーセントも真実が含まれていない」のである)。しかしだからこそ、言葉にしか成し得ない領域がある、と思う。写真は強力なツールだが、真実とはときにつまらないものなのだ。

文責:村上慧